

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 5 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580081

研究課題名(和文) デジタル時代における 声 の様態と経験に関する領域横断的研究

研究課題名(英文) Domain cross-sectional study on appearance and experience of voice in the digital age

研究代表者

高木 裕 (Takagi, Yutaka)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60116944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：2015年4月25日に、京都国際マンガミュージアム、京都精華大学国際マンガ研究センターとの共催で国際シンポジウム「ANIMEのアイデンティティ：表現・物語・メディア」を開催し、アニメの「声」の表現様態と、そこに立ち現れる主体の擬似的な経験の特質について事例報告をもとに、討議を行った。
アニメの場合、「声」の源となる仮想の身体の生成には、それに呼応する観客・視聴者・聴取者においても「声」の経験が不可欠であることを確認した。

研究成果の概要(英文)：On April 25, 2015, by Kyoto International Manga Museum and Kyoto Seika University International Manga Research Center was co-sponsored the International Symposium "Identity of ANIME: representation - story - medium". We held repeated discussions about the representation aspect of the < voice > Anime, and about the nature of pseudo- experience of the subject. I went to the discussion.
It was also confirmed that, in the case of ANIME, this experience of < voice > in the audience, the viewer - listener to be in response to it - is very essential to the becoming of a virtual body that becomes a source of < voice > .

研究分野：フランス文学

キーワード：声 デジタル 主体

1. 研究開始当初の背景

(1) 18 世紀における百科全書、19 世紀における詩と小説、20 世紀における映画。これらの領域は、それぞれの世紀に興隆し、人文学の核であると同時に人文学の再編を促してきた領域である。そしていずれの領域においても、「声」は人間主体の精神や内面を担保することを期待されてきた。

(2) 現在、デジタル技術が格段の進化を遂げた 21 世紀初頭において、「声」もまたデータのひとつとして操作されうる。そのため、「声」をめぐる現象および言説もまた変容していることが想定される。

2. 研究の目的

本研究は、百科全書と Wikipedia を、文学とブログを、そしてトーキー映画とアニメーションおよびデジタル音声合成技術を比較対照し、デジタル時代における「声」の変化を各領域において測定することで、デジタル技術が人文学に与える変容に歴史的・社会的・文化的座標を再度与えることを目指す。

3. 研究の方法

21 世紀初頭、実写映画はコンピューターグラフィックスの洗練によって、その存在論的位置づけへの根本的な変更を余儀なくされている。光の痕跡が記録される写真像と、絵は互いに分ち難く結びついている。存在論的に異なると見なされてきた二つの映像の混淆がもっとも顕著であるのは、俳優身体である。

デジタル技術がもたらしたこの変容は、キャラクターのコンピューターグラフィックスに身体を覆われてしまう俳優が声を中心にして、みずからのスターダムを構築する現象を生み出した。従来、映画スターはその視覚的現前によって観客とコミュニケーションを図ってきたため、彼・彼女らの声の前景化は新しい現象といえる。

本研究では、声の突出というデジタル技術が呼び寄せた俳優身体表象にメディア文化論的座標を与えるために、以下ふたつの隣接領域における声との比較対照から、考察をすすめる。

まずは、アニメーションである。なかでも、第二次大戦後の日本のアニメに着目する。アニメは、1 秒間に 24 コマをすべて異なる絵を描くいわゆる、フル・アニメーションではなく、12 コマないし 8 コマのみを描くリミテッド・アニメーションである。運動を選択するアニメが表現媒体として成熟するには、キャラクターに与えられる声の力が必要であった。そして、21 世紀初頭の現在、キャラクターの背後に隠れているはずの声優たちは、声に自らの署名を入れて流通させ、確固たるスターダムを築いているため、アニメは、デジタル技術によってその声が前景化したスターの身体を考察するための恰好の領域である。次に、音声合成ソフトである。声をそ

の持主から切りはなし、デジタルデータとして操作することを可能にするこのソフトは、人間主体を担ってきた声の脱神格化を促進しているかのようにみえる。しかし興味深いことに、それと同時に音声合成ソフトから作成される歌声をめぐる、数多くの映像作品が生み出され、各種動画共有サイトにおいて発表されているとおり、声はその持主とは異なる身体として聴取者に想起され、声の持ち主以上の実体をもって聴取者に立ち現われてもいる。

アニメにおける声の強化と音声合成ソフトにおける声の編成を支えているのは、技術とメディアによって形成される声と受容者とのコミュニケーションである。本研究は、個々のテキストにおける声の機能を分析することにくわえ、個々のテキストを形成する要素のなかでも、とくに観客・聴取者による声の聴取様態と音響技術の関係に注目し、デジタル時代における俳優身体の声の突出とそのスターダムの様態を多角的に考察する。

4. 研究成果

2013 年度は、デジタル時代における声の問題を文学・哲学と共有するための基礎作業に従事した。

2014 年度は、視聴覚媒体であるアニメにおいて、キャラクターを構成する視覚的側面と聴覚的側面が取り結んできた、また取り結びうる関係性を重点課題のひとつに選んだ。とくにアニメ制作現場でもデジタル化が進んできた 1990 年代から 2000 年代の作品を中心に考察をおこない、声が図像とずれることが女性キャラクター表象にもたらした革新を論じ、論文「戦闘美少女と叫び、そして百合」(『ユリイカ』Vol.46, No.15, pp.181-189)として発表した。そして、アニメを中心とする現代映像文化における声についての先駆的な研究を発表してきた小林翔氏と広瀬正浩氏を招聘し、研究会「現代映像文化における声と身体 アニメーションを中心に」(2015 年 3 月 18 日新潟大学)を開催した。石田はデジタル時代における俳優の声 実写とアニメーションの融合領域」を発表し、両氏との意見交換から、デジタル時代における声について、多角的な検討をおこなった。最終年度である 2015 年度は、3 本の単独発表「ロトスコープとアニメ『悪の華』を中心に」(国際シンポジウム「ANIME のアイデンティティ：表現・物語・メディア」2015 年 4 月 25 日：京都国際マンガミュージアム)、「声の突出 デジタル時代における俳優身体」(京都国際マンガミュージアム/京都精華大学国際マンガ研究センター 第 7 回国際学術会議第七回国際学術会議「コミコロジュー：理論と実践を絡み合わせる新《研究》」2015 年 9 月 27 日：京都国際マンガミュージアム)、「イケメンとイケボ」(東京大学大学院総合文化研究科附属 共生のための国際哲学研究センター(UTCP) 上廣共生哲学寄附研

究部門主催ワークショップ「イケメン×2.5境界、まなざし、在/不在」2015年11月8日：東京大学駒場キャンパス）を行い、マンガ、アニメ、カルチュラル・スタディーズ、哲学、文学の研究者と活発な意見交換を行い、現代文化における声の諸相の理解を深めた。

また、表象文化研究の立場から、番場は、現代社会におけるツイッターやブログといったソーシャル・ネットワーキング・サービスが、人々の新しい共同体意識とともに独特な文体と時間感覚を作り出していること、また、新たな言論状況の出現が、今日の民主主義における「声」のあり方に対するラディカルな批判につながっていることに注目し、かかる今日の状況の淵源を、19世紀後半におけるメディア環境の変化にさかのぼって考察することを試みた。まず第一に挙げるべきは、晩年のドストエフスキーが個人で刊行していた月刊総合誌『作家の日記』（1876-77、1880-81年）である。文学、評論、社会問題、国際政治、読者からの手紙といった雑多な素材を貪欲に取り込み、作家の私的な回想や信念をつづる「日記」であると同時に公的問題に関する堂々たる「言論」の場でもあったこの雑誌は、個人がメディアを持ち、従来の公/私の境界を侵犯していた点で、各種SNSによって牽引される今日の言説状況を先取りしている。第二の論点は、「小説」と「写真」という19世紀的なメディアが可能にした「声」と「身体」に関する新たな想像力であり、それを支えていた社会編制のあり方である。小説のジャンルの特質について、ミハイル・パフチンは「小説とはただひとつの言語の絶対性を拒否したガリレイの言語意識の表現である」（『小説の言葉』1934-35年）と述べ、その本質的な多数性と混淆性を強調した。複数の言語のあいだ（ラテン語とロマンス諸語、共通語と諸方言……）、複数のメディアのあいだ（声と文字、手紙と活版印刷、文字と挿絵……）、複数のジャンルのあいだ（叙事詩と小説、歴史と小説、小説とその映画化……）で生成してきた小説は、本質的に「折り畳まれるメディア」と呼ぶべき性格をもっており、各種メディアの固有性を志向して夾雑物を排除しようとしたモダニズムよりは、雑多なものの共存を肯定するポストモダニズムと親和的な面をもっているのである。また、小説ジャンルの発展は、個人の「顔」の主題化と分かちがたく結びついているが、このような方向で考察を進めていくなかで浮かび上がってきた第三の論点が、19世紀の写真について論じるとともに、その写真家としての実践を通して、グローバリゼーションに抵抗する「声」の所在を指摘していた写真家・写真史家のアラン・セクーラの仕事であった。「身体とアーカイヴ」（1985年）でセクーラは、19世紀において、写真家ナダールの肖像写真に代表される卓越した個人の顔への注目が、その裏面において、無数の犯罪者や逸脱者の顔を記録し、分類し、管理しよう

とした警察権力による写真使用に支えられていたことを示した。19世紀末の「影のアーカイヴ」は、名士たちのギャラリーや世界の観光名所の写真とあいまって、貨幣にも喩えられる包括的な交換システムを作りあげようとしていたのであり、その点で、20世紀後半のグローバリゼーションを予見するものだったのである。セクーラは、そうしたグローバル化する権力に対抗する「声」を、大洋を航行する船乗りたちのあいだに見出そうとした。「法螺話」を意味する“fish story”を題名に冠したセクーラの写真集は、中央政府による情報管理と、周縁化された船員たちの「声」の抗争を主題化し、グローバリゼーションの虚構を告発する「水」の表象の系譜をたどる（『フィッシュ・ストーリー』1995年）。日本における数少ないセクーラの専門家である神戸大学の前川修氏、映像論の立場からセクーラの重要性に注目してきた立命館大学の北野圭介氏、京都精華大学の佐藤守弘氏の協力を得て、表象文化論学会とPARASOPHIA：京都国際現代芸術祭2015の共催で、表象文化論学会第9回研究発表集会における研究発表パネル「アラン・セクーラ、写真とテキスト、イメージと地政学のあいだ」（2014年11月8日、新潟大学）、トークセッション「アラン・セクーラ、写真とテキスト、イメージと地政学のあいだII」（2014年11月9日、砂丘館）を開催し、翌2015年5月6日にも「Parasophia Conversations 06: セクーラを読む人 III—イメージの唯物論（について考える）」（京都市美術館PARASOPHIA ルーム）でセクーラについて集中的に検討する機会を持つことができたのは、大きな成果であった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

石田美紀、声の突出 --デジタル技術時代の俳優身体--、『あいだ/生成』6号、査読有、2016、21-27

石田美紀、運動と感情への接近 アニメーション『悪の華』の試み、『ユリイカ』、査読有、Vol.47, No.10、2015、221-227
逸見龍生、『百科全書』における政治的徳の言語 国民の記憶の受容とその再解釈について、WASEDA RILAS JOURNAL、査読有、2015、255-262

Yutaka TAKAGI、*La poésie*

nervalienne et le sujet en devenir,

Modernités vol.36(Université

Bordeaux III) ,査読有、Vol.36,2014、

83-91

番場俊、顔の装置としての小説の生成、
神戸大学芸術学研究室、査読有、第 10 号、
2013、55 - 60

〔学会発表〕(計 7 件)

石田美紀、イケメンとイケボ、東京大学
大学院総合文化研究科附属 共生のため
の国際哲学研究センター(UTCP) 上廣共
生哲学寄附研究部門主催ワークショップ
「イケメン×2.5 境界、まなざし、在
/不在」, 2015 年 11 月 8 日、東京大学駒
場キャンパス(東京都)

石田美紀、声の突出 デジタル時代にお
ける俳優身体、第 7 回国際学術会議第七
回国際学術会議「コミコロジ：理論と
実践を絡み合わせる新《研究》」, 2015 年
9 月 27 日、京都国際マンガミュージアム
(京都府京都市)

Tatsuo Hemmi, *Addition editoriale de
Diderot a l'article AME de l'abbe Yvon*,
Semaine de travail a Luminy, 2015 年
9 月 6 日、マルセイユ大学(マルセイユ
(フランス))

番場俊、セクーラを待ちながら 写真
とテキストの唯物論、Parasophia
Conversations 06: セクーラを読む人
III—イメージの唯物論(について考え
る) 2015 年 5 月 6 日、京都市美術館
PARASOPHIA ルーム(京都府京都市)

石田美紀、ロトスコープと アニメ『悪
の華』を中心に、国際シンポジウム「ANIME
のアイデンティティ：表現・物語・メデ
ィア」, 2015 年 4 月 25 日、京都国際マン
ガミュージアム(京都府京都市)

番場俊、導入 アラン・セクーラの
陰鬱な/悦ばしき学問、表象文化論学
会第 9 回研究発表集会(共催：
PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭
2015) 2014 年 11 月 8 日、新潟大学(新
潟県新潟市)

番場俊、顔の装置としての小説、第 8
回神戸大学芸術学研究会「折り重なる
メディア」, 2014 年 1 月 11 日、神戸大
学(神戸市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 裕(TAKAGI, Yutaka)
新潟大学人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：60116944

(2) 連携研究者

石田 美紀(ISHIDA, Minori)
新潟大学人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：70425007
番場 俊(BANBA, Satoshi)
新潟大学人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：90303099
逸見 龍生(HEMMI, Tatsuo)
新潟大学人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：60251782